

琉球秘策題辭

天保十五年三月十一日、西洋のフランス国より船が一艘、琉球に来る。乗船員はおよそ二三〇人、その長は琉球に、「フランスは以前より、中国へ通じてゐる。そのため清国皇帝より命をいただき、中国の近隣諸国へ国家間の商業取引をしている。よつて、琉球へも交易をしたい」と告げてきた。琉球は「琉球は小さい島で、財もないため、交易をすることはできない」とこれを断ると、長は「交易をしないのであれば、友好条約を結ぶ」と言い、琉球側は再び断つたがフランス側は聞き入れず、「先の二点を十分に議論しておいてくれ。今から六ヶ月後、我がフランス国の全ての兵と船を琉球に送る。その時に再度答えを聞こう」と言つた。

十九日、宣教師一人と、中国人一人を那覇港におろし、船は帆を揚げた。琉球人は、二人を残していく理由を問うた。フランスは「フランス国が大総兵船として再び来るときの通訳のためだ」と答えた。琉球人は、その一人を寺に居住まわせ、守り番を置いた。二十八日、中国人は通訳となり、琉球人に「イギリス人が長年、琉球を欲しがつてゐる。いずれ、必ず兵と船を琉球に送り込んで来る。今、フランスと友好条約を結び、保護をしてもらえば、イギリスの植民地と化す災いはないし、キリスト教を授けることもできる」と告げた。琉球は「我々の国は、孔子の教えを学んでおり、キリスト教の布教をもつてしては友好条約は無理だ」と断り、琉球にいる薩摩の統治機関者にこれを報告した。すると八月に薩摩藩主・島津斉興が、数人の役人と兵士一隊を琉球に送り、それらの件について処理させた。琉球にいる薩摩の者たちで様々な議論がなされた。「私は常日頃、憤りを持ちながら、近頃しばしば聞くことについて思う。西洋の卑しい外国人は長年、我が日本を、密かに狙つてゐる。我が薩摩藩は、琉球諸島、そして奄美諸島を管轄し、外国からの敵はその先に居り、防衛に重きをおかねばならない。とうとう西洋人が琉球に來たが、その本来の目的はわからない。始末のつけ方による得失によつては、我が国の安全性や危険性に關わる。私がその事に關わらなかつたとしても、臣下たるもの、我が国に影響することに臨むのであれば、我が国のために万全の策を考えられないでいられようか。」この時、一友人は命により、海を渡り琉球に使わされた。また出航するにあたり、私に琉球に関する処分のこちら側の解釈を記してほしいと求めてきた。私が考えるに、事を進めるにあたつては、よく考えを巡らせ、変わることに対しても、しつかりと決めることは、学術の大切な方法である。故にあらかじめ所定の方法や策を記し、事前に質問を設け、答えられることは十いくつかとする。その論ずるところは、弓や銃、剣を用いず、扇をふるいながら煙草を吸い、談笑の間にするのが、外国人を退ける術である。後日この事が、成功するのか、妥当であるのかを試してみたいと思う。

琉球秘策

客は尋ねてこう言つた「フランス国は琉球に来て交易と友好条約の締結を求め、これを断れば、再び軍と船を琉球に送り、武力を用いて、先のことを承諾させる気でいるのか」。

それに対し、「孫子の兵法書に書かれる、戦争とはそれ以前の話し合いによつて決まる。それに勝利するか否かが国家の存亡に関わるという『始計』の廟算を根本とする。今、彼等と我々の形勢を話し合い、根本的なところの意味を考えるに、『絶』と『和』との二策を用いて戦にしてはならない。『絶』とは、交易と修好条約を断ることであり、『和』とは、和好通商もやむなしということである。密かに西洋の事情を推測すると、フランスは上辺では交易を結びたいからと言つてくるが、その裏には、琉球を従えて拠点として南海諸島を侵略し、自らの身の丈に合わない希望を抱き、我が国・日本を窺い狙つてゐる。ヨーロッパ各国では、交易を断る国に対しては、兵や船を送り攻めうつべきとの議論があり、日本も交易を拒んでいるので、西洋より攻めうつべきとの考えがある。近頃、イギリスはアヘン戦争で中国に勝利し、悪いほうへ勢いづいてゐる。

一年(天保十三年)、オランダがやつてきた時に幕府にこう告げた。「イギリスは日本に開港を迫る考え方があり、且つ、天保十二(一八四一)年に琉球属島に漂流してきたイギリス人を殺したことへの罪も問うてきていて、薩摩への恨みもあるから、薩摩に行くとも言つていた。」またこの時、長崎に西洋の船が来て幕府宛に密書を差し出してきた。
「この船は、オランダではなく、イギリスかフランスだという。」又、琉球にフランスが来て交易と天主教を広めることを求めた。且つ、イギリス船が兵と船を琉球に送ろうとしている。イギリスとフランスは別の国と言つても、ヨーロッパの国の一つであり、同類である。彼等が長崎や琉球にいつぺんに来ることは疑うまでもない。彼らの考えは似ており、あの南洋にあるハワイは、西洋諸国が東海を往来するための要港の巣窟となつてゐるが、琉球もハワイのようにする考え方があるのだ。さて今やフランスは琉球を窺い見ている、薩摩軍は琉球に行き、彼等が求めるなどを絶対に許さない。さらに、武力を用いて彼等を追い払つてしまえば、彼等は恨みを持ち、好機とばかりに自国の兵を送るか、または、ヨーロッパ諸国と議論し、大軍となつて琉球に攻め入る。ひとたび戦が起これば、回避することはできない。薩摩藩も同様に、精銳の兵を選び抜き大軍を出し、遠い海に囲まれた島である琉球のために戦おうとしても、我らの国は、長き平和の中で戦いに慣れていない。とりわけ、海上戦になると不慣れな我らの勝ち目がないことは明らかである。たとえ、海上の戦ではなく、琉球に上陸し、首里城を守つたとしても、敵は多く、我らは少ないため、中山王(琉球国王)は必ず降参し、兵の応援もなく、勝利することはできない。そうであるのに、このように多くの兵を琉球に送つた時は、薩摩藩の守りも手薄となる。そうすれば、彼等ヨーロッパ諸国の兵は力を合わせ、多くの船で薩摩と琉球とを結ぶ海路を塞ぎ、大島や徳之島などはもちろん、屋久島、種子島、甑島などの列島を奪い、沿海の村々を侵略し、麿府(鹿児島)の海路も自由に往来できるよう

になつたとすれば、すぐに魔府に襲い掛かつてくることも考えられる。且つ、それは日本國中を巻き込んだ戦となり、ひとたび戦が起これば、莫大な禍を引き起こすこととなるのは見たようによくわかる。フランスはヨーロッパ中の国と繋がりがあり、本国の長さは六百里、横四百里、イギリスは西洋の島国であり、その大きさは南北經度、東西緯度共に二十度、この二つの國の本国の大きさはこのようであるとは言え、アジア、アフリカ、アメリカの大陸に多くの属国を持っている。また、この二か国を除いた他、ロシア、イスパニア、ポルトガル、イタリア、テルミニアなどの諸国は、皆、五大州の各国に交易をしている。今、フランスとひとたび戦を交えれば、ロシア等の諸国も応援に入り、心一つに力を合わせ迫りくることも考えられる（アヘン戦争の際、イギリス人はヨーロッパの諸国も応援に入つたとの説あり）。薩摩も、薩摩、大隅、日向の三国の力を使い、世界の大國と戦争をする。その勢いに著しい隔たりがないと思つてはならない。且つ、その兵法、或は我を守り、或は敵国を攻め、その進退や戦略を存分に出してこそ勝利するものである。そうであるのに、西洋の諸国は数万里の大洋を隔て、我と敵と兵を交わることは、敵から常に攻められるのみで、こちらから海を渡り敵へ攻めることはできない。だから、戦をしても追い払うばかりになり、俗に言う受け太刀ばかりで、形勢が変わることはないと見るべきだ。これらのこと踏まえて考えてみれば、本藩は大本、琉球は末になるので、大本を離れて、琉球で争いをすることは失策となるのみならず、甚大な損害となるのは明らかである。おおよそ、名将は常に、負けることがないと思うところに戦をし、危険で負けるような感じを受ければ戦はしない。或は戦で勝ち、或は戦わずして敵を屈させる。皆、名将の術である。愚将はこれと反対のことをする。孫子は「戦とは國の行く末を決める大事なことであり、それによつて人民の生死も、國の存亡にも関わつてくるので、よく考えなければならない」と仰つている。この言葉より、琉球の処分は絶と和との二策を主として、絶対に戦をしてはならない。また考へるに、およそ、古来より双方が戦をし、一方が負けた後に和談となる例も多い。もし今、こちらと西洋とで戦、あるいは利益がなければ、時機によつては和談になることも知つておかねばならない。今、戦いが始まる前に、彼等と和議をなせば、こちらに押しつけてくることもないからだ。なにか恥になることではないが、すでに戦に負けた後に和議になり、彼らが欲しいままにこちらを服従させようとすれば、こちらは彼らを抑えることができず、頭をあげることができなくなる。その時の無念を想像してください。よつてこの度、事を始めるにあたり、あちらと我らの形勢を計ると、「絶」と「和」との二策を用いて戦を回避するようにしていく。もし戦になつた時は、国を挙げて死ぬ氣で戦い、和議をしてはならない。近年、清国とイギリス国との戦況を書いた書を見ると、アヘン商売のことが原因で戦が起つた。古来、アヘン商売は国害となるから清国は禁止していたが、イギリスの密売によつて混乱が起き、戦となつた。清人は連年敗戦し、遂に清国より和議を申し出て、成り立つこととなつたが、イギリス人はこれを機に、色々と欲しままに力を利用し、清人はそれを抑えることができなかつた。清人も、和議を申

し出るのであれば、事が始まる前にしておけば、それら損失はなかつた。前車の覆るは後車の戒め、今回の事は、隣國の事だと他人事にならず、清國の事を鑑とするべし。

客は尋ねてきた、「戦によつて損なうものは既に聞いたが、その『絶』と『和』といふ計画を聞きたい」。

それに対してもこう答えた。「まず『絶』の策を述べ、その後『和』の策を述べる。イギリス人は昔よりしばしば琉球に来ては、通商を求めてきた。昨年も琉球・八重山島に来ては海陸を強行測量した。その事もあり、通商の件は琉球側も皆これを断つてゐる。そして、この度の琉球の話を聞くと、フランスが琉球を狙う意思は一朝一夕のことではない。フランス国は宣教師と唐人を残していき、大総兵と船を連れて再び来るとのことを告げていたが、よくよくその様子を見る必要がある。話によると、イギリスも琉球を取る意思がある、いずれ兵や船を琉球へ送り込んでくるとのことだが、イギリスの昔から行いを見ていると符合している。イギリスは唐土の事を未だおわらせずにいると聞いてゐるが、それが終わったのちに来るだろう。なので、フランスも再来し、琉球の答えを聞くだろう。その時は、我ら薩摩兵を琉球に送り、西洋人には知られないようにして、琉球に彼等との応対をさせる。その応接の方法は、礼や謝辞を尽くしてへりくだり、琉球の産物などの好品を多く贈る。この度の件を更に議論し、今年春に来航したフランスからの要求を、『琉球国は小さくて財もなく、琉球のみで貴国と交易する力も品もなく、常に唐土・日本から財食の供給を受け、わずかに国を立たせている状態だ。特に日本は琉球に隣り合う近いところなので、その往来も便利である。琉球は台風が多く兵糧が尽きることが多い。その他、水干で飢餓に陥ることもあり、唐土はやや遠いため、大体日本へ力を借りて餓死を逃れている。且つ、人材にいたつても日本より招いて物事を進めている。なので、日本を離れて琉球は立つことができない。それなのに、日本国はキリスト教を禁じ、西洋諸国と交通を厳しく禁じている。貴国(フランス国)と交易をするときは、日本と通ずることはできなくなり、長く日本との関係を絶つこととなる。今、日本を離れて貴国の命に従うと、貴国の方のみに頼ることとなる。しかし、貴国は海上数万里を隔てており、貴国のみ来航し、こちらからは船を出すことはできない。我らが飢餓もしくは事変があつても、貴国にすぐ告げることもできない。また、貴国が事故などにあつても、こちらからは行くこともできないし、すぐに貴国からもくることはできない。たとえ財宝を積んでも餓死を逃れられない。貴国はキリスト教を布教しようとしているが、既に告げた通、我々は孔子の教えを学んでいるので他教を受けることはできない。且つ、キリスト教を受ければ日本と関係を絶つこととなる、その後の有様は前述の通りである。貴国の琉球を保護しようという心遣いには感謝しているが、交易をできないのは、このような理由があり、謹んで、寛大な心でお許しください。』との理由で交易を断りなさい。しかし、この春にすでにこれらのような理由で琉球はフランスに返

答をしているので、また同じ内容で断ると重複してしまい、フランスは納得しないかも
しれない。時によつては、前文のフランスへの返答を大本とし、まだ告げていない理由
を答えてこれを隠し、義を立てて答える。右の理由で交通・通商を断つて、西洋人がそ
れで了承してくれればとても良いことである。しかし、西洋人が色々と言つて許さない
ようであれば、まず唐土の北京へ、中山王より遣いを出し、唐土の天子に謹んで願いを
こう。その内容は、西洋人が来て通行・通商などを強く求めてくる。しかし、琉球は小
さく貧乏であることを理由に断りを入れた。しかし先方は聞き入れず、何をしてくるか
わからない。琉球は唐土の属するので、仰ぎ願わくは、詔をフランス国王に下し、『琉
球は小さく財力に乏しい、もし西洋に通商・通交するときは、琉球は困窮し、一国とし
て立つていられなくなると、中山王が実態を言つてきた。故に、西は琉球に通商・通交
をすることがないようにと固く禁制を出していただきたい』と願うことだ。そのような
詔を、唐土の天子より西洋の国王にくだす。西洋の国王が詔に従えば、琉球に来航する
ことを辞め、船を引かせるだろうしかし、今や唐土の天子も西洋との合戦(訳者註・ア
ヘン戦争)で敗北し、もしかすると西洋へ詔を下すことを拒否するかもしれない。もし
くは、詔をくだしても西洋は従わず、なお琉球に、フランスから通商・通行などを求め
て続けてくるときは、先の大本とする実状を告げ、『琉球が独自に決断をすることはで
きないので、貴国はすぐに、琉球が保護を受けている日本の長崎へ行き、琉球への通商
などを求めてほしい。日本には幕府があり、国のことは幕府が決断をしており、外国と
のやりとりは長崎という所でやつているから、そちらで日本の官人にあつてください。
このことは薩摩では通すことはできない』と教え、すぐに長崎で対応してもらえる手配
をする。かつ、このことはなるべく琉球人から口頭で説明させる。なぜならば、文章に
してしまふと、それが証拠となつてしまふからだ。西洋人への応接は、謙遜して礼を尽
くし、さからわないことを第一とすべし。相手から乱暴になることはなく、こちらが言
うことを遂げられないことを無念として、強く押し付けてしまい事をしくじり、先方の
氣を立ててはならない、これを第一の心得とすべし。もし、先のように答えて、フラン
スがすぐに日本に行くことや琉球の要求を断り、様々なことを言いだして怒りの色が見
え、侵略または戦になりそうになつた際は、『日本と議論して再答する。こちらで秘か
に許可を出すことはできない、この事は日本に返答した上でないと決断できない』ことを
と/orい、その答えを延期させる。そして琉球に遣わした薩摩藩士三人を帰国させて報告
を求める、元雄も軽い和好や通商であつても、幕府の許可なければできないことを述べ、
以下の考え方で幕府に報告すべし。もしイギリスが来ても同じ和をもちいるべき。またそ
の交易の場は琉球八重山・宮古島で行うことを西洋人に求める。大信公(二十五代島津
重濠)もかつて琉球先島において交易場を開かれ、珍宝を得ることができるまでの話し
合いはありしとぞ。しかし、それでも西洋人が聞き入れなかつたら、運天港にて薩摩と
同じ場所で交易をさせる。ひとたび、彼等と交易を開くこととなれば、多事が必ず起こ
るので、後の永年の害にならないよう、よくよく詳しく話し合い、しつかりと法律をつ

くるべし。

ある人「幕府に西洋との通商を求めるには、どのような処置をすべきなのか」と問うてきた。

それに対してもこう答えた。「琉球は慈眼公(十八代島津家久)以来、薩摩に臣属し、附庸の国となつた。そうであつても、唐土の封爵を受けることは以下の理由がある。幕府の命にて、薩摩附庸の国であることは、海外諸国にもらすことを禁じられ、明らかにすることを許されているのは、宝諸島(吐噶喇)と往来通商することのみ。しかし、唐土と海外諸国も周知の意実で、そのことは唐土の書物に多く見かける。琉球は唐土より中山王の封爵を受けているので、海外諸国からすると、日本と並ぶ一国の扱いである。薩摩附庸の国と称し、琉球十三万石は、薩摩の七十万石であり、それは日本国の中にあるということ。琉球は唐土を父とし、日本を母とする。**この事は實に稱えたり。**昔、モンゴルより明国を取つたとき、琉球を胡服(訳者註・中国北方民族、胡人の服)に改めるか聞いたことがあり、幕府にたずねると、いずれも清主の処分に従うべきことの命がくだつた。それはこのようなものである。

寛永十五年、邦君(十九台島津家久)は唐土が琉球へ軍兵を送つたと聞き、直ちに、伊東肥後守祐昌、平田狩野介宗弘、猪俣為右衛門則康を琉球に遣わした。十月十五日、出航。翌年四月十九日に、祐昌。宗弘が琉球から帰つてきた。この時、清人は明国取つておらず、明の東南は流賊李自成・張獻忠等の兵乱が盛んであり、琉球に入寇するということは、琉球が流賊に属すことである。正保元年甲申(明崇禎十七年、清順治元年)、清太宗明の北京を取り都とし、国号を清とした。四年、藩主幕府に啓し、伊地知縫殿介重治・遠矢金兵衛良珍に命を下した。兵卒を率いて八重山島に行き、外的からの防衛に備えた。翌年、その守兵に着いた。明暦元年(明世祖順治十二年)七月、薬丸刑部左衛門、長崎の藩邸により、福州の来船より聞くところ、清主の詔あり。海船を福州に造り、使いを遣わし琉球を手なずけようとしているが、既に琉球は薩摩藩に属している。時に藩主は江戸により、家老・島津図書久通、伊勢兵部貞昭、新納右衛門久詮、町田勘解由久則、鎌田源左衛門政直たちは話し合い、「琉球は古来、薩摩に属している。今、清国のために衣冠を変えられようとしている。果たしてそうなれば、ひとり藩の恥のみならず、日本の恥となることと同じ。藩主に申し上げ、幕府に願い、琉球に軍を立てこれに備えることが妥当である」と。この月十九日、中村佐右衛門、鎌田甚兵衛を江戸に行かせる。家老・島津筑前久頼、島津中務久茂によつて藩主に上奏。八月、藩主は大老の酒井讚岐守忠勝と話し合い、久茂より老中・松平伊豆守信綱に願い出られた。二十二日、信綱等、藩主を呼び諭した。「琉球に清国王の命を聞かせるほうがよいだろう。もし清国王の命を断れば、国難が又起きる。あえて禍を招くことはするな。その他の事は、君に処理さ

せることをゆるす」。九月、久通等は命を受け、ただちに高崎総右衛門熊乗、本田六右衛門親武を渡海させ、これらのこととを琉球に説明した。明暦二年丙申、尚質王、清人が船を発し、使を琉球に遣わしたことを聞き、喜ぶ。藩の役人に会い、半の処分で軍を備えることを求めるが、なぜ高崎は未だ達せないのか。八月、これを幕府に告げる。

「旧記を見ると、このようなことが記されている。琉球は前条に述べたように、表向きは唐土の属国のため、他の藩との扱いが違う。フランスは既に清主より勅許をえて、唐土と近い属国との通商をするといえば、琉球は、唐土の属国なので、清主の命を拒むことは難しい。しかし、表向き通商を許すときは、フランスからの話だけで信じることができないので、さらに琉球より清国に尋ね、その真偽を明らかにしなければならない。清国に再び問うときは、こちらは通商することを延期するには良い頃だが、こちらのことをにおいてはかつて一得一失である。その理由は、清主より別段通商の許しあればその繫がりは堅くなり、こちらから手出しもできなくなり、フランスに通商を許すことは、こちらの許しのみの方が良いであろう。明暦中、幕府の命にて、琉球の衣冠は清主の命に従はせ、異国として処分したことがある。いま、琉球に通商を許すと、異国処分の例を用いると、明暦の例と同じとなれば、幕府の例を引用して求め、且つ通商を許さないなら、戦が起こり、日本までも戦乱となることも伝えれば、幕府これを許す。明暦中、幕府の命に、もし清主の命に従わなければ国難が起こる。禍を招くことないことを占めれば、今通商のことも同意する。もし、また幕府これを許さなければ、西洋人に諭し、日本に請い、許容しないからといって、どうすることもできない。この上は、さらに国から日本に願い出て、その許可を受けてください。日本が許せば琉球はこれに従う。実際に琉球の事情を思いやつて察してほしいと答えよ。さすれば西洋人は必ず心得て琉球は無事となる。

客はまた「西洋通商のこと、幕府がもしこれを許しても、西洋人が琉球に持つてくる諸品を、琉球及び薩摩のみで売りつくすことしかできず、幕府より今の唐物を禁ずるよう、他藩へ売るこことを禁じた時の損害は大きいのではないか」と問うてきた。

それに対して、「幕府唐物の他出を禁じたのは、その都合によつて設けた法である、ゆえに利となるときは幕府もその禁を解かないといけなくなる、もし幕府より西洋諸品他出を禁じれば、幕府に謹んで申し上げる。禁を解かなければ、琉球は立つていられず、西洋の下に入り、ついに日本は兵乱を招く意味となるので、その許可を得る方がよい。西洋通商においては、本藩の利になるように策を使うべきだ」。

客は、また問うてきた。「通商が一度でも始まれば、西洋人は力を持ち、琉球にいる薩摩の役人は段々力を弱め、西洋は次第に大島諸島を侵略し、彼等を制御できなくなる形勢となる。薩摩役人はどうするべきか」。対して、「このことは難しく、誠に通商を許すことはとても無念である。止められないからこの策にでる。前述したように、西洋はいまアヘン戦争で勝利をおさめ、その勢いはすごく、もし彼に通商をかたくなに断り、こちらに戦が及ぶときは、我々の国は、長年戦をしていないために戦に不慣れで、始まる前に既に結果は見えている。かつ、日本に戦乱を引き起こすことにもなるので、機会によつては通商を許す。通商が始まれば、西洋人の勢いが強まり、侵略のきっかけを生むことになる。故に、これから、こちらも別段の武器や力をつけるために兵を稽古され、それに備え、西洋人の勢いを抑える。武器や力をつけることを第一にすべきこととなる。もし、通商を許せば西洋人の勢い張るゆえに、ついに戦乱となる。我らはこれを知つて軍事力を整えることが、相手を牽制しやすい。たちまち戦乱が起ること、だんだんと起ころり始めるのとでは、『戦乱』が起きたことでは同じであつても、その進行具合によつて損害は異なる。今後、軍事力を整えた後、戦に及ぶことは我らに利が多い。もし整えなければ、通商を許しても無益となることを知らねばならない。その軍事力も西洋よりも多く作るべし。武器のことはまた事細かに話したいところだが、長くなるのでここでは略す。また、通商を開いたとしても、琉球は清主への礼、薩摩役人の渡海は今のようにするべし、ただち、薩摩役人も武器を備えるべし。

客問うて言つた。「西洋人久しく留まるの考え方をなし、彼らから、那覇などに館舎を造ろうとしてきたとき、琉球がそれを禁止しても聞かなかつたとはどうするのか」。対してこう述べた。「琉球人よりまづ禁止して、西洋人が確信を持って聞かなかつたときは、琉球より西洋のために館舎を造つてやり、西洋の手を加えさせないようにする。なぜなら、琉球が館舎を造れば、いつかそれを壊すことができるからである。西洋に造らせてしまうと、琉球より壊す *k p* とはできない。それに、西洋人は一度館舎を造れば、その他の西洋諸国が来て、同じように館舎を建てはじめることとなる。それは限りない害となる。また、琉球より西洋に告げるときは、琉球には外国人に館舎を造らせる国法がないので、こちらが造り与えると、表向きは西洋に御礼の意を込めて造るということにし、たとえ金は出すと言つても、琉球から造るようすべし。

客問うてきた。「西洋人に通交を絶つ策を用い、もしフランスが許容して帰つたとしても、またイギリスが来る。フランスは態度が敦厚だが、イギリスは横暴と聞く。ことに、イギリスは昔より、宝島・山川などの事で恨みを持っている。天保十三年長崎からきくには、薩摩に恨みがあり、薩摩に侵攻するといつてはいた。いま、フランスが琉球に

置いて行つた宣教師たちが言うにも、イギリスは琉球を取る意思があり、いつか兵や船を送り込んで来るという説もあるが、彼等は必ず来るであろう。さすれば、イギリスからの害はフランスより甚大となるが」。

対して、「このことを憂いでいる。イギリスの事情を考えるに、重ねて来航するだろう。しかし、フランスよりイギリスは必ず兵船と遣わすと聞いているが、フランスが交通を得るためと言うが考えられた策かもしれない。且つ、イギリスがいずれの日か来るとするならば、フランスへの交通を許すことができない。ゆえに、今井一往復といえども通交を絶つ策を用いる。いま、渡海の日、さらにイギリスが来るのか上京を探るべし。イギリスは横暴であることは様々な書物で見知っている。且つ、昔より度々琉球へ通商を請うており、許すことがあれば、今一度来たときに通交を許さなかつたら、戦を用いてくるかもしれない。ゆえに、その通商を許すのはイギリスよりむしろフランスが良い。

一昨年(天保十三年)壬寅の歳、イギリスと清国と講和の訳文を見ると、先年、取りあげたアヘンの代は銀二千百万両の内、このたび六百万両を渡し、その残り銀は證文を差し出され毎年五百万両づつ、五分の利息付で渡すこととなつた云々。両国、和睦をしたといえども、アヘン代銀の内、当年で六百万両を渡すことができれば、南京河上船山古浪嶼等へ寄せ置いている戦船を引き去る。しかし、残り銀を渡さなければ、總体退去は不可能。残り銀を全て渡し済んだうえで、退去をする云々と見たり。この文に拠れば總銀二千百万両を清国よりイギリスへ返した後、各戦船は引き去るの約束がある。この總銀二千百万両は大抵一年に五百万両づつ渡す計算によれば、一昨年壬寅の年より来年乙巳(弘化二年)にて四年を費やすことになる。然るに、意義知るは唐土の対処をしているので、琉球に来るとすれば唐山のことを議論し、アヘン代の件が總て終わることを巡ることとなる。となると、イギリスが琉球に来るは、来年より後になる。イギリスが来るといつても、前条に言つたような、フランスと同じ策を用いて応対する、しかし、こちらの守備は整えておくべきこと。

客は尋ねた。「西洋人琉球と交通をするときは、キリスト教を広める。それはどうするのか」。

対して「キリスト教は織田信長のときより始まる。京都にも教会があり、豊臣秀吉の九州征伐のとき、肥前にてキリスト教徒が勝手気ままにふるまい(訳者註・長崎がイエズス会領になつていていたことや日本人を奴隸として貿易していたこと)、初めてキリスト教を禁じた。しかし、キリスト教を禁じたのみで、西洋人が来ることを禁じたわけではなく、すでにだんだんと布教は行わっていた。東照烈祖(徳川家康)の時代となり、西洋人がひそかに来て告げた。「西洋人がキリスト教を広めたのは、布教によつて人心の心をつかみ、日本を奪い取る策略」だと。そして家康はキリスト教の禁止を厳しくし、西洋人の通商を禁じた。キリスト教が広まることの影響を見た。いまもし、琉球と西洋と

の通交を許しても、まずははじめにキリスト教は禁じるべきだ。秀吉の禁止令と同じ意味である。そのキリスト教を禁じる理由は、琉球もしキリスト教が布教するときは、日本と交通できなくなり、日本と交通を絶つことは、琉球は不作になり餓死が続出することとなる、且つ、琉球より民に命を下し、キリスト教を受けないようにする手もある。

客は尋ねた。「いま、官吏渡海の上、西洋人が和館を焼き払い、あらゆる狼藉を働き、また中山王を生け捕りして、中山王が降伏したらいかがする」。

対して、「かような非常時になつたときは議論するまでもない、その際は我らの兵を出して西洋人を討つべし。良し悪しの判断は天が下す。力不足は戦死するのみ、また、時によつては大島に引き取り、兵を加えて攻め討つ術もある」。

客は尋ねた。「琉球は清国より封爵を受けており表向きはその属国である。今、西洋人は清主に、琉球への交易や布教を求めたときはどうするのか」。

対して、「その可能性はある、今フランス人は清主に求め、清主より琉球へ詔をくだし、西洋との通商及び布教を許すことも考えられる。しかし、今は清国はアヘン戦争で負けたため弱く、西洋は強くなっている。西洋が清主へ求めたことを、清国は認めるしかない、フランスは、春に一度琉球へ来たあとに清国に行き、この謀事をするかもしれない。もし清主よりこの詔が下つたら、薩摩藩はひそかにこれを禁ずることはできないので、幕府に告げてその裁決を受けるのがよい。また琉球から清国に願い、通商・キリスト教を免じてもらうことを言わせ、そのことを延期させるのがよい。薩摩より密かに琉球に命じて、キリスト教を禁ずる道はあるだろうか。通商のことは前述のとおりにするべし」。

ある問い合わせは「もし西洋人、大兵を出し琉球を奪い、中山王これに降伏した時は、我ら薩摩兵を出して、彼等を討ちこれを覆すべきだ」。

対して、「薩摩兵を出し琉球を争うことは難しい。その事は巻初に論じた通りだ。そうなつたときは、琉球に書を送り、時機を見て討つべしと告げておく。時機とは年月を定めないことであり、そうなれば我らの威厳も落ちることはない」。

ある問い合わせは「前条所論の他に良策はないのか」。

それに対しても、「今、所論は多く東照烈祖の意志に基づく。豊太閤の方略は多意表に

出て臨機応変な策あり。あらかじめ言うのは難しい。また、私は前条所論の他に、琉球の難を除く考えがある、これ秘奥のことなので言外に出さず」。

客は尋ねた。「琉球は本藩兼領の地にて、その十二万石は幕府の領分に關わる。しかるに今、西洋人との交通を許さない。通商の路を一度開けば、その害は多い。どうして始めから戦を主とし、琉球から戦渦が薩摩に至つた時に皆で死守すれば義に当たるのに、なぜ和と主として士氣を落とすのか」。

対して「これは私が先のことまで深く考えて計画を練る。琉球は我らの兼領の地といえども、表向きは唐土の封爵の国であり、皇国の封域の国の一つとは名目上異なり、我藩に属していることは、日本国中しか知らないことである。その詳細は前章に論じた通りだ。故に海外諸国に推出して言えば、本藩より軍を発して琉球で戦つても、隣国からの応援の義を逃れられない。故に、通商を西洋人にゆるしたとしても、義理に失う事はない。たとえば、清主より琉球に表向き勅を下し、西洋人に通商およびキリスト教を許した時は、本藩より表向き西洋人に対し、その命令を破ることは不可能である。その命令を破れないのは、唐土は表向き、本藩には内属の地だからだ。また、損得の判断を考えず、強いてしまえば戦に及ぶと、速やかに戦乱を招き、国の危機となる。故に時機を見て無事な策を張り、軍備も増強して、その変革に備えるときは、国の無虞を保つなり。その死守が義に当たるとしても、得失を判断を考えず。突然に戦いいたずらに死ぬのは愚夫の考え方、匹夫の勇であり、これみだりに戦を主とするのは、亡国を招いた宋の賈似道と同じである。且つ、本藩の人、氣質の多くはいったんの勇気をあてにして、先まで深く考えた策が少なく、これは深く戒める点だ。故に、私は深く先まで見越した考えを主として、五穀の神と長く国が安全に保たれるための良策を用いる。

右一冊を8月8日起草。至る翌九日、而卒業係急卒之用之故也、故其辭
主于達意、或文辭之拙句字之誤謬待他日之修正耳

甲辰八月十日

五秀堯 草